

東京芸術祭ワールドコンペティション2019
批評家審査会レポート

新たな舞台芸術評価の尺度を創出する、という目的を掲げ、2019年10月29日（火）～ 11月4日（月）に渡っておこなわれた東京芸術祭ワールドコンペティション。本レポートは、11月4日に東京芸術劇場アトリエウエストでおこなわれた、日本語を話す世界各地出身の舞台芸術専門家たちが「批評家賞」を選出するためにおこなわれた審査会の記録である。

批評家審査員のメンバーは以下の6名からなる。

アジアからは、生前の如月小春、岸田理生とも親交の深かった李静和（リ・ジョンファ、政治学者（文化の政治学）、成蹊大学法学部教授 | 韓国出身）。

オセアニアからは、アダム・ブロノフスキ（演出家／作家／役者、オーストラリア国立大学アジア太平洋カレッジ准教授 | オーストラリア出身）。

ヨーロッパからは、歌舞伎研究者であるビュールク トーヴェ（埼玉大学人文社会科学研究科准教授 | フィンランド出身）。

アフリカからは、フォー サミエル（俳優、立教大学教育講師 | カメルーン出身）。北米南米大陸からは、日本文学・演劇研究者のコーディ・ポルトン（カナダ・ヴィクトリア大学太平洋東アジア学科教授 | カナダ出身）。

日本からは、演劇批評家の森山直人（京都造形芸術大学舞台芸術学科教授 | 日本出身）。

議論のファシリテーターを担うことになったコーディ・ポルトンは、批評家賞を決めるにあたって、審査のための以下二つの「基準」を確認することから始めた。

- 1) 2030年代に向けて、舞台芸術の新たな価値観を提示しているか
- 2) その価値観の提示の仕方において、技術的に高い質をもった表現がなされているか

読み上げたコーディの声に審査員たちはうなずいており、批評家審査員たちがこの基準をそれぞれ咀嚼したうえで、この場に臨んでいることが見て取れた。この基準をどう解釈しているか、コーディはひとりひとりに尋ね、10年後の舞台芸術はどうあるべきか、そしてどうなっていくかの予想を含めた視座を引き出した。環境問題や政治情勢にも関心を深く持つ審査員たちの視野は舞台芸術だけに閉じてはいなかった。彼らは、舞台芸術を生み出し、そして受け入れる社会が、2030年を迎えた時にどうなっているかを、おのおののルーツとフィールドから予想していた。

例えばアダム・ブロノフスキとフォー サミエルは、国連の人権宣言や持続可能な開発目標

(SDGs) について触れ、アーティストたちが想像力を使いながら世界的な問題にどのように向き合うべきか問題提起した。ビュールク トーヴェは、コンペティションにノミネートされた作品を10年後にも独立した興行として成り立つか？ あるいは公的な助成金でサポートすべきか？ という観点を提示した。

こうして、互いの評価について言葉を交わし、審査員同士の信頼が醸成されつつある中、議論は本題に入った。以下、上演順に、推薦人、アーティスト、タイトルおよび審査員たちのコメントまとめを抜粋して記載する。

【ヨーロッパ】

推薦人：アニエス・トロリー（アヴィニョン演劇祭プログラムディレクター | フランス）

アーティスト：エル・コンデ・デ・トレフィエル（バルセロナ、スペイン）

タイトル：『可能性は風景の前で姿を消す』

完成度高く、興行として十分に商品化できている作品。10年か15年前の私なら、喜んでこの作品を観たと思うが、今は新鮮な刺激を受けなかった。語っている内容もヨーロッパのある程度の豊かな街にありふれているように思えた。（ビュールク トーヴェ）

【アフリカ】

推薦人：キラ・クロード・ガンガネ（ワガドゥグ国際演劇・人形劇祭ディレクター | ブルキナファソ）

アーティスト：シャルル・ノムウェンデ・ティアンドルベオゴ（ワガドゥグ、ブルキナファソ）

タイトル：『たびたび罪を犯しました』

脚本、演出、出演を兼ねた上でのこうしたフィジカルな演劇の力は、2030年でも必ず残るだろう。古いと同時に新しく、否定しがたいものを持っている。（森山直人）

【オセアニア】

推薦人：スティーブン・アームストロング（アジアTOPA クリエイティブディレクター / アーツセンター・メルボルン | オーストラリア）

アーティスト：シドニー・チェンバー・オペラ（オーストラリア）

タイトル：『ハウリング・ガールズ』

腹から肺、肺からのど、のどから唇へ表れる呼吸の音には言葉がなく、トラウマの解決はなされな
いが、暗闇からぱっと明るくなった時の衝撃は忘れがたく、非常に強い印象を残した。（コーデ
イ・ポールトン）

【アメリカ】

推薦人：カルメン・ロメロ・ケロ（サンティアゴ・ア・ミル・フェスティバル エグゼクティブ・
ディレクター | チリ）

アーティスト：ボノボ（サンティアゴ、チリ）

タイトル『汝、愛せよ』

無意識な暴力と、日常的にかかわってしまっている私たちの姿を見せる演出が今回のコンペティ
ション参加作品には多く漂っていた。常に「他者」を作り、自分を防衛してしまう人間。それは歴史
的で伝統的なところから始まっているということ、インディオと入植者によるプロローグの場面
が示していた。（李静和）

【アジア】

推薦人：キム・ソンヒ（インディペンデントキュレーター／プロデューサー／元光州アジア芸術劇場芸術監督 | 韓国）

アーティスト：戴陳連（北京、中国）

タイトル：『紫気東来-ビッグ・ナッシング』

影の世界に一生懸命入っていくということは、今ここから逃げ出したいからではないか。外のうるさい音を排除して、沈黙を大事にしたいというのは、現代の北京にいる芸術家の意識なのだと思う。（アダム・ブロノフスキ）

【日本】

推薦人：横山義志（東京芸術祭国際事業ディレクター）

アーティスト：dracom（大阪、日本）

タイトル：『ソコナイ図』

ネグレクトなどの社会的に真剣なテーマが扱われていた。演者は、少ない台詞を本当に心から感じて言っており、その言い方も美しかった。シリアスなメッセージを持つ作品だが、演出家が、荒々しくアグレッシブな演出を選ばなかったのだろう。（フォー サミエル）

全員のコメントが述べられたところで、審査会は休憩に入った。午後の部にて、話し合いと投票によって「批評家賞」をいよいよ選出することに。まずは、審査員たちがそれぞれ最終候補として議論の俎上に乗せたい3作品を一次投票で選んだ。

▼一次投票結果

『ハウリング・ガールズ』5票

『ソコナイ図』『汝、愛せよ』4票

『たびたび罪を犯しました』3票

『ビッグ・ナッシング』2票

この時点で『可能性は風景の前で姿を消す』の受賞可能性は消えたが、審査員たちからは候補作への重要な指摘が次々となされた。議論してわかったのは、批評家たちは皆「どうしてこの作品を選んだか」と同じくらい「どうして選ばなかったか」という理由を明晰に説明できるということだった。

ブロノフスキは『ハウリング・ガールズ』について、若い女性を中心にした構成はよかったと述べつつ、声を出し続ける「表現」がずっと続いていたことが、言い出せない経験に基づく「トラウマ」というモチーフと矛盾していると感じられたために投票しなかったと言った。

『汝、愛せよ』を選ばなかったコーディとフォー サミエルからは、本作はテレビドラマ的な形態であり、スピードが速く、テキストに圧倒されて個人の観客として処理する余裕を与えてもらえなかったという意見が出た。

『ソコナイ図』に投票しなかった李静和は、ポエティックな戯曲において登場人物の死に際に言葉が失われていく中で、反語的にボキャブラリがリッチになってもよかったのではないかと述べた。

作品の評価をめぐる辛辣な意見も時には出たが、「好き嫌い」と「評価の高低」を混同しない姿勢に自覚的だったのが、批評家審査員たちの特徴であった。トーヴェは「『ハウリングガールズ』は、好きではないけれども」と前置きしながらも、音楽の完成度やメッセージ性を高く評価して受賞の候補作に推した。『ソコナイ図』についても彼女は、登場人物が死を自分で選んだことにしたことに対し、死は人間が支配できるものではないし、極限の貧困状態に追い込まれた人物を軽んじているとして「無責任だと思っている」と明言した。しかし、戯曲が技術的に美しいということも重ねて述べた。

森山は『ビッグ・ナッシング』について、批評家審査会として彼の手法を評価したいと付け加えた。表現方法はアーティストの空想世界に寄っているけれど、検閲の存在などにより、どのような表現を選ぶかがアーティストの活動拠点によって変わってくるからだ。

最終的に、『ハウリング・ガールズ』『汝、愛せよ』『ソコナイ図』の間で、決選投票がおこなわれることになった。持ち票はひとり1票。悩む審査員たちに、コーディは「これから10年間に成長していく、皆さんが応援したい芸術家を選んだらどうでしょう」とだけアドバイスしたが、直後におこなわれた投票では、極めてシンプルに結論が出た。

▼決選投票結果

『汝、愛せよ』4票

『ハウリング・ガールズ』1票

『ソコナイ図』1票

こうして批評家賞は『汝、愛せよ』に決まった。一度の決選投票で決まったことに、審査員たちからはすがすがしい笑みがこぼれた。納得のいくまで、全候補作について議論が尽くされた証拠だった。

議論の中で、審査員たちから何度も「今年の基準でベストな作品を選べと言われたらこれなんだけど」「2030年代に向けて、という観点で見るとこっちになる」というやりとりを聞いた。しかし、今このシアターウエストにいる私たち全員が、2030年代に舞台芸術に関わり続けているかはもちろん、生きている保証だって、考えてみればどこにもない（本コンペティションにて上演された作品の出演者、スタッフ、観客のすべてを含めたらなおさらだ）。それでも、審査員たちは11年後に必ず来る「2030年」という時代をおのおのシミュレートし、自分たちが10年以上のレンジを持って作品の質を吟味するという使命に責任を持っていた。無私の心で、未来の観客・未来の批評家に見せるために繋いでいく視点。それこそが、批評家審査会の持つ冷静で温かいスタンスだった。

議論レポートの締めくくりに、本コンペティションがディレクターの横山義志によっていかに入念に準備されたかも触れておきたい。

コンペティション開催前には、参加作品を推薦した推薦人たち全員がその推薦理由を語る「推薦人プレゼンテーション」がおこなわれた。また、推薦人たちが自身の活動内容を報告する「推薦人トーク」の時間も別途設けられていた。このことは、「なぜ推薦人たちが、この作品が次世代を担うに値すると考えたか」を知ってもらいたいという横山の思いのあらわれであろう。

劇場は不特定多数の人々が集まれる場所ではなくてはならないと同時に、高い専門性を持つ特定の人々によって耕されていかなければならない。東京芸術祭ワールドコンペティションの大きな意義は、世界のあらゆるエリアに、その時々のアクチュアリティを見極められる推薦人がいると示したこと、同じく様々な出身の、アーティスト審査員、日本語話者である批評家審査員を集めることができたことである。それは、世界中のどこで活動しようとも、その芽を見守り育て、適切な時期に適切な評価の場へ送り出す職能を持った人物が存在するという、舞台芸術従事者たちへの強いメッセージなのだ。

落 雅季子

1983年東京生まれ。一橋大学法学部卒業。LittleSophy 主宰。舞台芸術批評にまつわる実践の他、近年はクラシックバレエを学んでいる。Twitter:@maki_co